

作品作りをゴールとせず、美術を通して 複眼的な視点で考える力を育てる



美術

野村由香里先生

高志高校（福井・県立）

教員歴32年。中学校、養護学校、高校で教壇に立ち、2011年から福井県教育研究所で「福井県造形教育研究会」発足に携わる。異校種間の授業研究の手立て「造形ユニット」作成。2013年高志高校着任。真善美を教育の柱とし、教育の意義が生徒に伝わる美術の授業づくりを心掛けている。「制作と同じように仕事も創造」と語る。

美術教科と生徒の見取り

感性を高めて
美術で洞察力を付けたい

ミニチュアの襖絵、サザエさん宅の模型と本格的な設計図や仕様書、生徒たちが書いた特許申請書…。高志高校の野村由香里先生の教員室からは、次々と興味深いものが出てくる。

「美術は心をワクワクさせる教科でありたいと思っています。ただ楽しいだけ

ではなく、次に何かやりたくなる、難しくても乗り越えたいくなる授業を目指しています」

先生がこう考えたきっかけは、美術の教育研究会などに参加して、「その授業は生徒のためになっているか？」と疑問に感じたことからだ。すべての生徒が美大を目指すわけではない。「美術は才能やセンスだ」と生徒がつぶやく授業は失敗だと思った。美術科を通して学んだことが、将来、自分と社会に役に立つものでなければならぬ。

また、生徒たちの変容も気になっていた。ゆとり教育が導入され美術の時間が減ったところから、刃物などの道具が扱えない、素材を工夫して扱おうとしない、表現したいことが思い浮かばない生徒たちを目の当たりにしてきた。

「答えのある問題には意欲的でも、自ら感じ取り、考え、工夫する一連の力が弱くなっていると感じました。ものを見て感じる力、経験や知識をつないで工夫する力、筋を掴む洞察力を鍛える美術教育を考えました」

見方・考え方

目的をもって、複眼的な
視点で観察する面白さ

野村先生が考案したのは、作品作りを目的やゴールとしない多様な美術の授業だ（下記「授業デザイン」参照）。一例として、福井県では中学2年と高校1年で日本画に取り組んでおり、それを利用した授業を開発した。

先生が作成した題材名は「自分の感性を探ろう〜時空間を内包する襖絵」。襖絵は、その時代の美意識と生活や思想をつなげて読み解く素材だ。「襖絵には例えば、『卯の方角（東）』に描く木だから『柳』など、仏教や陰陽五行などが日本文化として消化された解字や見立てなどを、古典や歴史の知識と関連させて味わう楽しさがあります。和室が身近でなくなりつつある生徒が、美術から日本文化を理解し、

授業デザイン

1 襖絵から日本文化を学び、 自分の感性と向き合う授業

日本文化の中で生活していない生徒たちに、自国の文化の成り立ちを意識させ、自分の感性と向き合う。お寺の襖絵が風水や陰陽五行に基づいて描かれている知識などを入れながら鑑賞。古典や歴史への興味、日本人の文化や美意識につなげたうえで、生徒自身の感性で襖絵の表現法で作品作りを行う。



室町時代の襖絵を鑑賞し、額装の絵とは異なる動的な視線が生み出す時間と空間の表現や、日本文化の思想などを知る。

襖絵のように三方に作品を配置し、Webカメラを使って空間にいる視点で鑑賞しあう。

生徒の作品



登下校で美しいと思ったものから主題を考え、襖絵の表現法で構成する。



2 自分の未来像を 色と形で創造する

「人は思ったものになる」をテーマに自分の未来像を描く授業。自分の長所・短所を言葉で書き出してグループで共有し、他者視点でイメージしたことを比喩で本人に伝える。あこがれの人物や生き様も比喩で表し、それらの比喩からイメージされる「なりたい自分」

福井県造形教育研究会の「造形ユニット」

「造形ユニット」は、授業の最小単位である「指導ユニット」(上)と、複数の指導ユニットを必要に応じて組み合わせて構築した「授業デザインシート」(下)から成る。「造形ユニット」はネットで共有され、美術科教諭同士で指導案づくりの情報交換の手立となっている。

「授業デザインシート」では、身に付けたい資質・能力を「美術で付ける将来に生きる力」として分解。その中から絞り込んだ狙いで題材を選定する。題材名には大きな狙いを伝える題材名、課題は副題で示す。授業は作品鑑賞で終わるのではなく、題材名の狙いに戻るようになっている。

伝統の継承や創造に考えを巡らせることが狙いです。また、視点を固定して見る西洋絵画と、動的視点で構図を捉える日本画との比較も、文化の背景を読み解こうとする目をもつことで、自身の感性や他国の感じ方の多様性を考えるようになります」

美術以外の知識がないと、深く作品を理解することができず、知識があるとさらに作品を見たり、「日本の美術や文化のこともっと知りたい」と生徒たちが変化していく。

そして野村先生が美術で養おうとしているのが、自分と社会とのつながり

を、作品の鑑賞や制作という具体的な「もの」を通して「体感」することだ。「ものづくりの過程で、形を捉えるという目的のために対象物をどう見たらいいかを考えたり、素材から形を作ろうと考え、そして実際に作るという感覚に落とし込んだ思考力を発揮できるのは、美術だからできることだと思えます。作ることで、感じ取ったことが体に残るのです」

ものごとを「見る」意義のきっかけがわかれば、他の題材の授業でも集中して考えるようになり、「ものを見るのが面白くなった」と言う生徒もいる。ものを見るきっかけが簡単にはつかめない生徒のために、他の生徒との話し合いなど、他者視点を入れた複眼的視点で見て考える授業も行っている。

授業のつくり方

資質・能力を美術的に分解
そこに「真善美」を取り入れる

授業をデザインするにあたって先生が活用しているのが「造形ユニット」だ(上図参照)。これは教育研究所に勤務していた際に野村先生自身が中心となって作成した、美術教育プログラムのベースだ。生徒が必要としているのは美術的な技法よりも、人生をどう生きるか考えることだ。そのためになぜ美術を学ぶのかの意義を求めている。

野村先生は美術教育の意義は「真善美」を伝えることだと考えている。

教科ならではの「見方・考え方」が社会でどう生きる?

美術を他教科と結びつけたり、他者の意見を取り入れて複眼的な視点で思考する力を身に付けた生徒は、社会でどう活躍していくのだろうか。

「例えば外国人と対峙していく際に、自国の文化理解から自分を理解し、他国の多様性を想像する目をもてれば、自分の考えをもつて互いを尊重しようになると思います。それが真の国際人の姿ではないでしょうか」

3

日本の文化に新たな工夫を加え、生活の困り感を解消する商品を作って特許を出願する

御幣など紙を使った日本文化の特徴を学び、そこからヒントを得たパッケージや家具、特許商品の存在を知る。得た知識をもとに、生活のなかで困っていることを解消する商品を紙で作成し、特許を出願する授業。特許について学ぶことで社会と作品の関わりを学び、特許の書類を作成する際に、人に伝える文章と書類作成についても考えていく。

生徒の作品



題名:「光に向かって」。たくましく生きていきたいという思いを込め、未来は明るいものだと思い前向きにがんばっていくという作品。



を色と形で表現していく。自分で描いた未来の自分画を、1カ月間家で見続けた感想をレポートにまとめる。

「成長」と題した作品。上へとまっすぐに伸びていくイメージで、これを見ることで成長していく自分を感じられるようにしたい気持ちが込められている。